

未来へつなぐ 子どもと学ぶ

sign

サイン

No. 11



特集

自主性を尊重して、
学校生活を見守る。

対談



富山市教育委員会と
武蔵野美術大学。
お互いが目指す
教育の共通点とは。
これからの学びについて
意見を交わしました。

学校法人武蔵野美術大学理事長
長澤 忠徳



富山市教育委員会教育長
宮口 克志



進行：石本沙織



先生も「子どもたちから

学んでほしい」

長澤 私はよく「あの通か彼方に見える水平線の上に立てるか」と学生に問いかけています。もちろん現実的には立てないのですが、最初からあきらめずに「ぎっと立てるんだ」と思う力が大切でしょう。それがないと、言われたとおりにはしかできない人間になってしまいます。

宮口 まさに富山市でも大切にしている点であり、先生が子どもの発想を止めず、可能性を見いだすことが主体的な学びの出発点でもあります。さらには、たくさん褒めて子どもの成功体験を増やすことも重要で、その経験が積み重なると果敢に挑戦する姿勢が身につくのではないしょうか。

長澤 同感ですね。学生に聞くと、子どもの頃の成功や褒められた経験はその後の大きなモチベーションになっていますし、自分を肯定する力に変わるので。

石本 新しい教育を行う中で、先生たちが学ぶこともたくさんありそうですね。

宮口 そうですね。富山市では主体的な学びをどう実践すれば良いのか、先生が一緒に考える研修などを実施しています。また、各校の事例も共有していますね。新しい形の授業を行うと、子どもたちの方が先生よりも柔軟で、いろんな発想が出たり成長が起きたりします。その姿から先生も学んでほしいですね。

「心の音」を引き出すと

集中して学ぶ

石本 長澤理事長は富山市出身ということで、今回の企画にお越しいただきました。先ほど芝園小学校の授業を見学しましたが、富山市が進める教育をどう感じましたか？

長澤 たくさん驚きがありましたね。たとえば同じ教室内でも、グループで議論しているところもあれば、一人で作業をする子がいるなど、いろいろなスタイルが混在していました。

宮口 私たちが目指すのは、何を学ぶか、誰と学ぶか、どのように学ぶかを子ども自身が考える「主体的な教育」なんです。ですから、いっしょに学ぶ人数も相手も、人によって異なることがあるのです。

長澤 もうひとつ面白かったのは、同じ教室内で異なる科目をやっている子どもたちがいたことです。

宮口 これは「自由進度学習」というもので、複数の教科の中でどれを学ぶか、子どもたちが自分で決めていきます。苦手な教科に時間をかける子もいれば、反対に得意教科を伸ばそうと応用問題まで深くやる子もいますね。

石本 そのせいか、つまらなそうにしている子がいませんでしたよね。

長澤 自分で選んだ科目だからこそ、集中して学ぶのでしょ。大げさでなく、こういう授業を大学でやりたいと思いますよ。



長澤 これからもぜひ、この教育を続けてほしいと思います。すでに素晴らしい授業が行われていますから、広くこの取り組みを理解していただき、支援の輪が広がっていくばうれいしますね。

宮口 ありがとうございます。授業見学などを通して、保護者の方や地域の方に私たちが目指す教育を伝えていきたいと思っています。この改革は、一部の学校だけが行うものでもなければ、市内全校が同じことをするものでもありません。各校の実情に合わせて、それぞれに最適な教育を追求していきます。



早くから「創造的思考」を

養う意味

宮口 これまでの教育は、どちらかといえば同じ内容を、斉一律で教えるものでした。知識を注入して、テストで成果を測る。しかしこれだけ変化の激しい時代になると、主体性をはじめ、テストでは測れない「非認知能力」が重要になるでしょう。そこで今までの「教える」から「育てる」に転換した教育を進めているんです。

宮口 そうやっていただけるといいです。主体的な学びを行うために大切にしているのは、子どもたちに物事を不思議がってもらうこと。たとえば雲は水や氷からできているのに、なぜ空（空気）に浮かんでいるのだろう、とか。「なぜ？」を生み出してあげると、自分から探究していくんです。

長澤 おっしゃるとおり、最初の「意志」をどう引き出すかが学びの基本です。意志の「意」という字は「心の音」と書きますが、いかに一人一人の心の音を出してあげるか。今日の授業にはその工夫がたくさんあると感じました。

宮口 その上で、すぐに人に頼らず一度は子ども自身で考えることも大切になっています。社会に出れば、うまくいかなかったことに気づくから、そこで抜け出す力を培ってほしい。先生がすべて教えてしまうと、そういう力が身につきませんよね。

No.1
u
b
i
s

富山市教育委員会

長澤 変化の激しい時代という話がありました。まさに今、世界は「VUCA」の時代に入っています。これは、状況が目まぐるしく変わり未来が予測できない時代、もはや何が問題かも分からない時代という意味。こうした中で大切なのは、今までにない発想を生み出すクリエイティブの力、「創造的思考」です。

※VUCA(ブーカ)とは…
「Volatility(変動性)」「Uncertainty(不確実性)」「Complexity(複雑性)」「Ambiguity(曖昧性)」
それぞれの頭文字からとった言葉。

石本 武蔵野美術大学では、創造的思考を養うことを大切にしていますよね。富山市の教育と通じる点はありませんか。

長澤 強いつながっていると思います。私たちが行っている教育は、美術を通して人間の自由を獲得すること、つまり生きる力を養うことであり、その核が創造的思考なんです。

今日見た授業は、まさに新時代の創造的思考を培う教育ではないでしょうか。それを小学校から始めていることがうれし。いんです。年齢を重ねるほど人の価値観は固まり、大きく変わるのには難しくなりますから。

教えて！ いするぎ先生

—— 令和時代の家庭教育を考える ——



石動 瑞代

富山市教育委員
富山短期大学幼児教育学科教授

家庭教育の最適解？

予測困難な社会と言われる令和の時代。親は「どのような変化にも対応し、乗り越えていく力」を子どもに育みたいと考えます。一方で、親世代の価値観が必ずしもフィットしない社会状況から、「より安定したライフコースに子どもを方向づける」ことをPRする教育サービスを模索する姿もあります。コスパやタイパが求められる時代、最も効率のよい教育方法（最適解）を準備することが、子どもの未来を支える家庭教育だという錯覚に陥りやすいのかもしれませんが、しかし、本当に大切なのは、子ども自身が「ちょうどいい」状態を見つけるプロセスです。

「ちょうどいい」と「ゆらぎ」

子どもはゆらぎながら発達します。「おもちゃを渡したくないけれど一緒に遊びたい」からおもちゃを共有する、「キツイけれど上達したいから練習する」など、発達に応じた葛藤があり、それを乗り越えて成長するのです。「ゆらぎ」は、「葛藤」ほどのストレスや緊張を伴わない「心の揺れ」。この「ゆらぎ」こそが、子どもの日々の成長を支え、自分の「ちょうどいい」を見つける作業を行っています。

友だちの意見に心が動き新たな発想や目標を得たり、初めて参加する集団や場の雰囲気合った言動を選んだり。子どもは毎日さやかな変化に出会い、小さな選択や適応を行うことで、自分の「ちょうどいい（安心感を持って自分を発揮し、成長できる環境）」を見つけ、柔軟に生きる力を獲得していくのです。

安心してゆらぐことのできる環境

私たちは水の流れや風、焚火の炎に心が癒されます。それは、不規則に小さくゆらぐ環境が私たちの脳に心地よさと活力をもたらすから。自然界では、わずかなゆらぎが安定した状態をつくり生命を豊かに育むと言われます（一定速度でなく変化する川の流れが魚を育む）。

子どももまた、固定的・規則的変化しか起こらない環境でなく、小さな変化に富む環境でこそ、自分の「ちょうどいい」を見つけることができるのです。子どもが安心してゆらぐことができるよう、見守りと支えを柔軟に提供することが家庭に求められるのだと思います。

学 校 再 編 新 聞

古里、音川小 令和8年4月に統合



教育長に申し書を手渡す
会長と副会長ら

「古里小学校・音川小学校統合検討協議会」は2月14日、令和8年4月に音川小を古里小に統合することを藤井裕久市長と宮口克志教育長に申し入れた。

14日は、協議会の山田政夫会長（古里自治振興会長）と中山博昭副会長（音川自治振興会長）のほか、協議会委員である両校のPTA役員2名が市役所を訪れた。

今後、地域住民と学校関係者でつくる統合準備協議会を新たに立ち上げ、統合に向けて両校の擦り合わせを進める。

市長・教育長に申入れ

古里小・音川小



◀ YouTube やってます！

signへのご意見・ご感想は
こちらからお願いいたします ▶

